



医学英語論文 手とり足とり

いまさら聞けない論文の書きかた

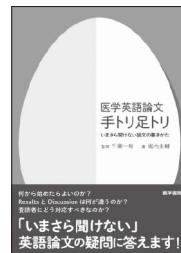
千葉 一裕 監修
堀内 圭輔 著

●A5 頁220 2022年4月
定価：3,850円(本体3,500円+税10%)
[ISBN978-4-260-04883-5] 医学書院刊

[評者]

戸口田 淳也

京都大学 iPS 細胞研究所特定
拠点教授・基盤技術研究部門



著者の堀内圭輔先生とは整形外科の臨床における専門領域を共有していることから、以前より親交を深めていただいている。同時に基礎生物学の研究にも従事されていることから、私が編集委員を務めている学術誌に投稿された論文の査読をしばしばご依頼申し上げている。大きな声では言えないが、査読者の review の質は、いわゆるピンキリである。そのなかで著者の review は、内容を十分理解したうえで、研究の目的は論理的なものであるのか、実験計画に見落としがないのか、結果の解釈は妥当であるのか、そして結論は結果から推定されるものなのかという点について、毎回きわめて適切なコメントをいただいている。たとえば最終的な意見が reject であっても、投稿者にとって有用なアドバイスとなるコメントを comfortable English で提示され、いつも敬服していた。本書を一読して、なるほど論文を書くということに対して、このような確固たる姿勢をもっておられるから、あのような review comment が書けるのだと納得した次第である。

著者が述べているように、学術論文とは情報を他者と共有するためのツールである。SNS を介しての情報共有と異なる点は、情報の質、信頼性に関して、複数の専門家が内容を吟味したうえで公開されることである。そして公開された情報に基づいてさらに深く、あるいは広く研究が行われ、その成果が再び学術論文として公開されていく。つまり学術論文を書くということは、小さな歩みであるかもしれないが、科学の進歩に貢献するということであり、自分の発見

したことを、わくわくする気持ちで文章にするということである(私の大学院生時代のボスは、Nature 誌に単独著者で「I found」で始まる論文を書かれていた!)

本書は、「動詞化できる名詞はできるだけ動詞化する」などの「医学論文を書くコツ」的なガイドブックではなく、論文全体の構造から細部に至るまでを、タイトルにあるように手とり足とり教えてくれる内容になっている。すべての論文の基本構造である Introduction, Methods, Results そして Discussion の説明の冒頭には、それぞれのパートの重要なポイントが簡潔に記載されている。Methods は「信頼に足る研究手法・研究倫理に基づいた研究結果だと示すこと」、Results は「研究の追体験ができるように書くこと」、そして Discussion は「結局この論文で言いたいことは何なんだろう」という疑問に答えるための「適切な論点・回答を用意すること」であると、いずれも読んだときに思わず「その通り!」と心のなかで喝采した。「英語論文の作法」としてフォントの使い方や、今でも時々迷ってしまうようなスペースの使い方などの解説から、近年問題が増加している研究不正の疑念を抱かれないための適切な画像処理の手法、SD と SE の使い分け、biological と technical replicate の「n」の違いなど、適切な統計法の使用に関してもていねいな解説がなされている。さらに Podcast の応用などの時代に即した内容も盛り込まれている。

初めて論文を書く学生のみならず、指導者の立場にいる方も、ぜひ一読をお薦めしたい。